若手研究者海外派遣プログラム
派遣終了報告書

1　派遣者	
所　属　機　関	国文学研究資料館
氏　　名	クリストファー・リーブズ

2　派遣計画 概要	
派　遣　国	台湾
派　遣　期　間	平成 28 年 9 月 5 日　～　平成 28 年 10 月 14 日
派遣先機関名	国立台湾大学
（英語）	National Taiwan University
受入教員名	許暉林
（英語）	Xu Huilin
研究課題名	日本漢文の再検討――唐朝漢文資料の調査及び蒐集
（英語）	Reexamination of Japanese Sinitic Literature: Investigation and Collection of Chinese Works from the Tang Dynasty

3　派遣による研究実績

（1）調査研究実績　　（研究計画に沿い、実施したことを記載してください。）

当初、研究計画を提出した際に、次のように調査内容を述べた：「日本の漢詩・漢文を新たな視点から見直すため、国立台湾大学図書館所蔵の漢籍を調査する。日本漢文や漢語に莫大な影響を及ぼした唐朝に撰ばれた漢詩集及びその周辺の資料や諸論文を調査し、台湾の研究者と意見交換をしながら学術的な検討を行う。」中国語が堪能であり最後の意見交換は滞りなく遂行し、特筆する「実績」はない。なお、「莫大な影響を及ぼした唐朝に撰ばれた漢詩集」云々の調査結果に関しては、書き留めるべきことがある。研究計画に沿い唐朝に撰ばれた漢詩集——例えば『唐人選唐詩』、『景龍文館記』、『文館詞林』など——に関する論文などを調べたが、日本文学への影響はいうまでもなく、中国文学史における位置や価値でさえ、発展性のある先行研究は管見によれば、さほどないようである。要するに、和漢比較文学（台湾・中国でいう中日比較文学）の研究に関しては日本ほど進んでいない状態である。暨南大学の王琢教授はすでにこの事実に触れ刺激的な発言をする（『暨南学報』第4冊第141期（夏2009）中の「20世紀中日比較文学研究の回顧および展望」）にも関わらず、少なくとも台湾の学界ではいまだ目覚ましい発展を見ない。国立台湾大学の曹景恵（『台大東亜文化研究』第1期（2013）中の「和漢比較文学の概論」）は出典論を重んじ、日本の60～80年代に流行っていた小島憲之の出典論を超えない。

国立台湾師範大学の李育娟教授の論文に出会い、始めて独創力と発展性の高い研究課題に惹かれた。『漢学研究』28:1 (3月2010) 中の「『江談抄』の詩話と北宋の詩話」及び『漢学研究』30:2 (6月2012) 中の「宋代の筆記と『江談抄』の体裁」にその主な成果を纏めている。和漢比較文学における唐朝の存在があまりにも強すぎ、宋の文学は表に出にくいものであることを嘆く李育娟は、『江談抄』に見られる詩人逸話——詩人・詩作に関する面白いエピソードや雑談——と宋の詩話との類似性を強調する。初歩的な研究ではありながら、出典論を乗り越えているものとして評価すべき。日本文学における中国文学の「影響」は出典論の担うところであり、和漢比較文学の発展を促す一方、その可能性を拘束しているところもある。李氏は中日文学の影響関係を踏まえながら、直接に影響を確認できないものをも視野に入れている。これを「対照研究」或いは「平行研究」と呼んでいる。出典論はあくまでも語彙や典故にとどまり、文体（ジャンル）や構造のような大きい要素に関する考察にはほぼ役立たない。『江談抄』はすでに詩話の如き逸話が見られ、しかもそれは唐ではなく宋（厳密にえいば北宋）の詩話と酷似しているのは、影響（出典論）的には実証できなくても、対照的に比較すればその類似性を認めざるを得ない。

李氏の論文は一例に過ぎないが、今回の調査結果を代表するものとして、特別に掲げた。勝手な憶測だが、今後の国内及び海外における和漢比較文学は二つの変革を見せるのであろう：第一、唐より宋の方に注目が集まること。第二、影響より対照という比較方針を取ること。対照研究であれば、中国と日本ばかりではなく、英米文学との比較も可能になり、所謂 source studies（出典論——フランス的な比較文学）よりは comparative literature（比較文学——英米的な比較文学）に重なるところが増えるのであろう。

※　掲げた論文はすべて中国語で書かれ、論文名の日本語訳は筆者による。

（2）基幹研究プロジェクトにおいてこの派遣が果たした役割

計画書に「漢字圏の大学や研究機関などの情報を収集して研究者との交流を深め、現時点において比較的手薄な中国・台湾との共同研究の推進、及び国際的な研究者ネットワークの構築に資するところがある」と書いた。調査の結果としては、国立台湾大学の研究者との交流により「国際的な研究者ネットワークの構築に資する」ところがあった。日本文学研究科の陳明姿教授のみならず、中国文学研究科に属している受入教員の許暉林准教授などとの交流を通し、台湾の学界を幅広く知ることができた。

（3）所属機関における学術分野に貢献する事項

今回の調査対象となる漢文資料を蒐集・研究する事により、国文学研究資料館の漢文資料を一層充実させ、日本語の歴史的典籍である日本人の漢詩・漢文の研究に貢献することができる。特には、宋の文学に関する先行研究（論文）を数多く複写し、日本漢文の研究に供する。

（4）研究成果（著書、論文及び報告書名・講演題目）

発表：「江戸・明朝・西洋の類書を比べる――専安の『唐土訓蒙図彙』を例にして」（次世代ロンド　2016年12月2日　京都大学にて）

【内容】台湾大学で入手した資料の一部を参考しながら、日本の江戸時代に編まれた図鑑・類書を考察し、部類の方針、記述のありかたなどを比べてみたものである。出典論（source studies）というよりは、台湾大学で入手した論文に見える「平行的」（parallel studies）な研究である。

（5）見込まれる研究成果（著書、論文及び報告書名・講演題目）

論文：「明の辺縁儒学と江戸の理学――三浦梅園の『玄語』を中心に」（仮題）

【内容】台湾で購入した黄麗生編『辺縁儒学と非漢儒学――東アジア儒学の比較的研究（17～20世紀）』（台北：国立台湾大学出版中心、2012年出版）という書物に刺激され、明朝に行われた「非漢儒学」つまり蒙古や琉球の理学を、江戸時代のそれと比べる試みである。三浦梅園の『玄語』を中心に置く理由は幾つかもあるが、そのひとつに、梅園は中国の儒学のみならず、西洋の天文学も織り込んでいるがため、出典論にも平行的研究にも適している。（まだ「案」の状態なので、具体的な内容は未定である）

（注意事項）

・本報告書は、帰国後1ヵ月以内に提出して下さい。

・この報告書を、本機構により刊行、Web掲載、広報冊子等として公表することがあります。
この場合、内容に影響しない範囲で修正を行うことがあります。